





すぐにはかみ合わないもどかしさがある一方で、感動的な豊かな議論も開始されています。

暴処法弾圧の5人の仲間を取り戻す署名を訴えた分会では、職場丸ごとの署名が集まっています。なかなか組合活動に参加できなかったり、教員がストライキにはいることに疑問をぶつける組合員さんに、「難しいだろう」と思い込んで躊躇するのではなく、正面から向き合えば、組合員からは日頃たまりにたまった怒りや要求があふれ出てきます。

最初は「戦争」や「ストライキ」とは別物のように捉えられていた問題が組合員との討論の中で少しずつなっていく、お互いに「そうなんだ」と気づきが生まれ獲得されていくこともありました。

ある分会では、「実は8月6日、修学旅行前の平和学習の下調べのため平和公園にいたんです。柵で封鎖された平和公園を見て『これって、もう戦争やん』って感じました。そうしたら聞こえてきたデモのシュプレヒコール、時代がここまで来たらああいう闘いが必要だと思いました。あそこに日教組奈良市がいたところうれしいです」と言われたときは驚きと感動でした。

組合員は私たちの闘いを見てくれ

ていて、それぞれに考え、行動を開始しています。組合員、労働者の中に飛び込んで11・3労働者集会に向かって、全力で組織化をやっているたいと思います。

(写真は、3月27日の日教組奈良市が呼びかけた「春の嵐行動」)